

銀山と植生の回復

石見銀山が 1923 年に閉山され、廃坑となった。鉱山が広がっていた山や谷間はほぼすべて自然に埋められている。鉱山の中心であった仙ノ山の大部分は現在では鬱蒼とした森に覆われ、何百もの採掘トンネルや坑道の多くは見るできない。

アカマツ、シラカシ、コナラ、アラカシなどの在来樹木が 20 世紀に植えられたスギに混じって生育しており、森は徐々に自然な状態に戻りつつあることがうかがえる。成長が早く、丈夫な竹が、その多くは周囲の樹木に覆われているため日当たりが悪い森林内の集落跡地に順応している。

湿潤で温和な気候が旧鉱山周辺の植生の比較的早い回復に役立っている。しかし、仙ノ山周辺に自生する在来の樹木が繁茂しているのは、鉱山が操業していた時代の森林管理の方法にも関係している。家屋の暖房や製錬施設の燃料として大量の薪や木炭が必要だったが、石見銀山の管理者は土砂崩れを防ぐため、鉱区内での木炭生産のための伐採を禁止した。代わりに近隣の集落周辺の森林から木を調達し、そこでも安定供給のために伐採が規制された。このような政策により鉱山中心部周辺にはその土地固有の木々が生き残り、閉山後に地域の生態系は急速に回復し始めた。